人文フォーラム

38

2013.3

CONTENTS

巻頭言
学部のカリキュラム改革に寄せて
人文学部長　安酸　敏眞……1
別れのあいさつ
石狩川　小野寺　靜子……2
学園を去るにあたって　寺田　稔……3
ゼミ室紹介
1部　英米文化学科　4年　柴田ゼミナール……4
国際交流レポート
第11回カナダ・ブロック大学研修旅行報告
Jérémie Bouchard……6
2012年度カナダ・ブロック大学研修旅行体験記
近藤迪子、濱良平、長野勇、藤井麻里絵……8
2012年度韓国大田大学校夏期研修
本間美沙都……12
岩崎ゼミ・米坂ゼミ　震災ボランティア報告―その2―……13
卒業生通信
コンビニエンスストアに勤務して　吉田　豊美……17
大学院の窓
大学院に学ぶ　大島　直樹……18
研究、その足跡……19
編集後記……裏表紙

北海学園大学人文学部

巻頭言

学部のカリキュラム改革に寄せて

人文学部長　**安酸　敏眞**

わが人文学部は平成五（1993）年に設立されましたので、本年は設立二十周年の各種の記念行事が企画されています。しかしわたしたちは過去を振り返ってただ懐かしむだけではいけません。近年大学を取り巻く環境は目まぐるしく変化している上に、学部スタッフも大幅に入れ替わっています。そこで昨年来、学部のカリキュラムを本格的に見直し、平成二十六年度より新カリキュラムを導入すべく、目下学部を挙げて最後の詰めの作業を行っているところです。

現今、大学改革がしきりに叫ばれていますが、なぜ大学は改革されなければならないのでしょうか？ また大学改革はなぜカリキュラム改革を伴うのでしょうか？　そもそもカリキュラムとは一体何なのでしょうか？　カリキュラムとは、教育内容を学習段階に応じて整序配列したもので、しばしば教育課程と同義に用いられます。カリキュラムがこの意味で最初に用いられたのは、スコットランドの大学においてであったそうですが、カリキュラムという言葉は元々ラテン語です。すなわち、curriculum は「走る」（curro, currere）から派生した名詞で、原義は「1．走ること；競走。2．（天体の）運行；軌道。3．（競走用）戦車。4．滑走路。5．人生行路」です。欧米ではいまでも「履歴」ないし「履歴書」のことを curriculum vitae（略称 c. v.）と言いますが、これは上記の 5 に相当する用例で、course of (one's) life という意味です。ちなみに、「走るべき行程」（第二テモテ 4：7）を意味する cursus（英 course；独 Kurs；仏 cursus の語源）も curro から来ています。

大学におけるカリキュラムとは、いわば学生が四年間の教育課程を走り抜ける走路のようなものです。しかし学生は単にその上を走ればよいのではありません。走るときには必ずいかに走るかが、つまり走り方が問題になります。単なるランニングやジョギングと違い、大学における学びという走りは「競走」という意味合いを持っています。「落第」とか「不合格」があるのはそのためです。使徒パウロは、「わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない」（第一コリント 9:26）と言っていますが、勉学に関しても同様のことが言えます。したがって、カリキュラムははっきりとした教育目標に裏打ちされ、学修年限の段階に応じた体系的な配列になっていなければなりません。そうでなければ、それに見合ったスキルや力が効果的に身につかないからです。

高等学校卒業者の半数以上が大学に進学するようになった今、かつての大学とは異なった新たな課題が随所に立ち現れています。《ユニバーサル段階》に突入した現下の大学は、国公私立の別を問わず、どこでも改革を余儀なくされています。そして大学改革は最終的にはカリキュラム改革に行き着かざるを得ません。教育目標を明確にし、四年間の教育課程を有機的・体系的に整備し直す努力を怠れば、そこで学ぶ学生だけでなく、大学や学部そのものが競走に敗れることになるのです。Universitas semper reformanda〔大学はつねに改革されるべきである〕！　そしてカリキュラム改革はその中核に位置づけられるべきものです。学生たちが「目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない」ために、わたしたちは絶えずカリキュラムの点検整備に努めなければなりません。より良い人文学部にするために、倍旧のご理解のほど宜しくお願い申し上げます。

◇別れのあいさつ

石狩川

日本文化学科　教授　**小野寺靜子**

昨年の４月頃から『朝日新聞』水曜日の夕刊で「石狩川　風景への旅」を連載しています。石狩川に関わる多くの土地が登場してきましたが、特に月形、鶴沼、浦臼、宮島沼、樺戸山地、ビトエ、石狩浜の記事に接し、懐かしくなりこのところ記事に接する度に私にとっての石狩川について考えています。

本庄睦男の小説『石狩川』には、会津落城とともに伊達家岩手山支藩の家臣たちが、明治４年トウベツに移住し開拓に本腰を入れ始めるまでの２年間の苦難の生活が書かれていますから、石狩川には私が抱く郷愁のようなものを受け付けない厳しさがあります。昭和 39 年７月 10 日に北書房から出された『本庄睦男遺稿集』が手元にありますが、これを読んでも直接石狩川に関係はないものの、本庄睦男という人が厳しい時代を生きたということが伝わってきます。

学生時代、帰省の時に列車の窓から見た、初冬の降りしきる大量の雪をまるで吸い寄せるようにしてのみこみながら、しかし何事もなかったかのように流れていた石狩川の圧倒的なスケールの大きさに畏怖の念さえ抱きました。私が育った家のすぐ近くを石狩川の支流が流れていましたが、春になると岸辺にはエゾエンゴサクや二輪草が咲き乱れて綺麗なのに、雪解け水をたたえた濁流が渦巻きながら恐ろしい様相を見せながら流れていました。そういうものが目に浮かびますから、やはり石狩川は人を寄せ付けない怖さ、威厳のようなものがあるのでしょう。このところ、自分が育った所やそれに近い環境を知らないうちに求めるようになっています。本当は厳しい自然なのでしょうが、郷愁のようなものが先立ち、これからは石狩川支流の旅をしてみたいと思っています。

私はこの３月で定年退職を迎えます。平成 13 年４月、人文学部日本文化学科の一員となり 12 年経ちました。日本文化学科のカリキュラムは創設期の意欲を反映して創意に満ちたものでした。その後、カリキュラム改革があり変更した部分もありますが、日本文化学科１部で行われている卒業研究に対する複数の教員による口述試験は引き継がれました。これは学生の皆さん、教員ともども負担の多いことですが、卒業研究の質を高める上でなかなか良いことだと思っています。素晴らしい卒業研究に出会って、よくここまで頑張った、と感動したこともあります。また、皆さんの日ごろの何気ない言葉や態度に励まされてきました。今感謝の気持ちでいっぱいです。長い間、ありがとうございました。

人文学部のますますのご発展を祈念申し上げます。

学園を去るにあたって

日本文化学科　教授　**寺田　稔**

この３月で、北海学園大学での 21 年間の教員生活が終わります。私は、平成３年に教養部に赴任し、大学の組織改組の関係で平成 18 年に人文学部に移籍しました。平成 18 年からの７年間は、研究の内容や講義の内容から私自身の力を最も活かすことが出来た期間であり、学園生活で最も充実した有意義な期間でありました。これも教職員の皆様方のご支援のおかげと思い、深く感謝を申し上げます。

私は、人文学部の専門科目である日本地誌・日本文化演習・日本文化基礎演習などを担当してきました。日本地誌では、地域によって自然環境や産業活動、さらに人々の暮らしが異なり、それぞれの地域に地域の特性や地域の伝統文化が存在することを理解させ、その理解が後の日本文化研究の一助になればとの思いで講義を続けてきました。私の思いが少しでも学生に伝わったとするならば、大変に嬉しいことです。

私の心に強く残っている思い出は、日本文化演習で学生と共に関西地方を巡ったことです。日本の伝統文化に触れることによって日本人の心の理解に結び付けばと思いながら、学生と一緒に楽しむことが出来ました。奈良・京都での寺院や日本庭園の見学、宇治での茶の栽培、伊根町での漁村集落の散策、個人研修で学生と訪れた琵琶湖周辺の市町と信楽焼きの登り窯の見学など楽しかった多くの思い出が次々と蘇ってきます。講義や研修旅行などで学生と共に楽しめたことは、教師冥利に尽きる思いです。

私は、学部の学生時代から日本全国を旅するなかで機会があったら住んでみたいなと思った街がいくつかありました。それは、札幌市、仙台市、金沢市、広島市、福岡市などです。そのなかで北海学園大学に赴任し、札幌市で日常生活が送れた事は大変な喜びでした。札幌市での生活は、私に北海道農業に関する調査・研究のチャンスを与えてくれ、多くの地域の農業について興味を持って調査することが出来ました。特に十勝の調査では、十勝農業の素晴らしさを知ると同時に、十勝に暮らす人々から多くの事を教えてもらいました。北海学園大学に赴任したことによって、横浜市で暮らしていた時には想像することが出来なかった多くの喜びや感動を味わうことが出来ました。

在職の 21 年間は、楽しく有意義な時間でした。私に楽しく有意義な時間を提供してくれた北海学園大学、親切に温かくお付き合い下さった教職員の皆さんに心から感謝を申し上げます。自由人となる退職後は、今まで行くことが出来なかった地域や場所を訪ね、新たな知識を積極的に吸収したいと考えています。

最後に、北海学園大学が北海道を代表する私学として、さらに大きく発展することを心から願っています。

ゼミ室紹介

１部　英米文化学科　４年
柴田ゼミ

ゼミ指導教員から

このゼミでは、メディアについて勉強し、各自のテーマで卒業論文を作成します。「メディア」と一口に言っても、インターネットを使って展開する SNS や電子端末、DVD や CD などの記録媒体、テレビや新聞などのマスメディア、本やうわさ、さらに文字や話しことばまで、その範囲は広大です。メディアを厳密に定義する作業も大切ですが、その作業をとりあえず括弧に入れ、メディアと呼ばれるものすべての中から各自がテーマを選び出す方法を採用しました。とはいえ、徒手空拳で何かを掴み出すことはできません。広範な対象群から有意義なテーマを選ぶために、メディアに関する古典と最新の研究を勉強しました。具体的には、３年生の一学期から４年生の夏休み前まで、エンハンスメント技術（人間の機能を増強する技術）の展望、印刷技術の影響、声と文字の文化の違いについての重要文献を精読しました。その間、関連する小品を適宜取り入れながら、興味を持った対象について一人ひとりに本を紹介してもらったので、全体としてかなり網羅的にメディアを勉強できました。捉えどころのなかったメディアの中で主要な地位を占めるものがあることが理解できたことでしょう。４年生の２学期以降は、卒業論文の本格的な執筆に取り掛かり、数回の経過発表と個別の論文指導を経て、この１月、全員無事に卒業論文を提出しました。

卒業論文の題目を見ると、企業広告、雑誌、電子書籍、ウィキリークスなど、メディアの多様性を反映するように広範囲にわたっています。授業で取り上げた文献を幹にそれぞれの関心の枝を伸ばし、自ら選んだ課題に粘り強く取り組んだ成果がうかがえます。柴田ゼミ第一期生の皆さん、よくがんばりました！

（柴田　崇）

学生から（あいうえお順）

安藤　夕香

このゼミでは、メディアについて学びます。今まで学んだことのない分野だったため、苦労もありましたが、数多くの文献を読み、わからないことにも向き合い、ゼミの皆と共に考えることで、日々新たな知識が増え、非常に良い経験となりました。また、卒業論文に取り組むのは不安もあり、大変ではありましたが、最初から最後まで柴田先生やゼミの皆がサポートしてくれたため、最後までやり遂げる事が出来ました。さらに、日々の大学生活や就職活動についても親身に相談に乗って頂き、とても感謝しています。

菊地　智美

私はメディア（媒体）に興味があり、このゼミに入りました。その中でも科学技術を通して人間の能力を増強するエンハンスメント論争は特に印象に残りました。治療と能力増強の境目が曖昧であり、何が正しいのか正解がないため、自分なりの答えを考えることが難しかったです。みんなで意見を言い合いますが、他の人の考えを聞くことで視野を広げることもできました。ゼミを始めてからは、日常生活における当たり前のことにも疑問を持ち、自分の意見をしっかりと持てるようになったと思います。

越中　奈々

大学に入学してから１年次・２年次と英語や英語圏の歴史や文化などについて学んできましたが、ゼミではそれまで自分が勉強したことのないような、未知であることについて学びたいと考えていました。このゼミで学ぶことのできることの１つに人間の身体機能や精神を薬や遺伝子操作などの先端技術によって増強すること、人間自身を変革してしまうことであるエンハンスメントというものがあると知り、それこそ今までなかなか考える機会がなく自分にとって未知であることであると思ったためこのゼミに入ろうと決心しました。そういったことに関して学び、先生やゼミの仲間たちと議論をする中で、生きることとはどういったことなのだろうかと深く考えるようになりました。エンハンスメントについて学習するといったことを通じて、生きるとはどういうことなのかということについて考えるという経験はこのゼミに入っていなかったら絶対にできなかった経験であっただろうと思っています。

佐藤　由香里

柴田ゼミではエンハンスメントやナショナリズムなどについて学んでいきます。最初は内容の難しさに戸惑うことがあるかもしれません。しかし、難しさと同時に楽しさを感じることができると思います。ゼミでは本の内容に関して自分の考えや感じたことを伝え、ゼミの仲間達の意見も聞いていきます。そうした議論では、自分では考えつかないような意見を聞く面白さがあります。また、３年生と４年生が一緒にゼミを受けたり、卒業論文に関して意見を交えたりと充実した活動ができると思います。

竹田　麗華

このゼミに入って、初めて知ることが多くありました。特に印象に残っているのはエンハンスメント（能力増強）についてです。授業でこの言葉を耳にするまで知ることもなかったし考えたこともない分野の話でした。人間に対して行う治療と能力増強の境界はどこにあるのか、人間に元々存在している能力を増強することに対する倫理観など、普段考えたことのない内容で最初は考えることも難しく戸惑いもありました。理解は難しくても将来起こりうる話であり、考える時間が得られたのはよい機会であったと思います。様々な観点からメディア論について考えることができ、このゼミに入って良かったと思います。

二川原　千景

柴田ゼミでは、主に、本を読みこんで発表時にみんなで疑問点を解消していくという授業内容です。本は先生が指定したものや、私たちの希望に沿ったものを、その都度決めていました。中には難しい本に苦戦することもありましたが、マス・メディアを専攻して学ぶ上で基礎的な知識を身に付けられたと思います。４年からは、個人の卒論に焦点を当て、指導していただきました。３・４年合同の卒論報告会や、ゼミコン等の機会もあり、先生も一人ひとりの意見を尊重してくださるので、和やかな雰囲気のゼミです。

国際交流レポート

The 11th Short-Term HGU
— Brock University Study Abroad Program

Reported by **Jérémie Bouchard**

From September 3 to September 23 of this year, Professor Masami Iwasaki and I had the privilege of accompanying 24 HGU students to Brock University, St. Catharines, Canada. These three weeks of cross-cultural exploration and intensive language learning were an experience our students are not likely to forget. As most would agree, experiencing life in an English-speaking country is perhaps the best way to master English. But it also allows us to explore new aspects of our personality and deepen our understanding of communication in general.

I believe that individuals who speak more than one language not only have more than one tool with which to express their thoughts, they are also expert communicators. Learning a second language (and a third and a fourth……) is perhaps the most challenging and enriching intellectual process one can engage in, as it involves a complex reevaluation of our thoughts and our way of seeing and interacting with the world. The more perspectives we gain towards this world, the sharper our knowledge and insights become. In addition, language learners have the unique advantage of experiencing directly how their mind works in real time. Ultimately, learning another language is, I believe, a way to become a better thinker.

Needless to say, as a teacher, I am always thrilled to see how my students engage in this process. This has never been so obvious than during this three-week study abroad program. The very first day, the 24 students Professor Iwasaki and I accompanied began to use English to interact with Canadian people, and some even used their second language to interact with each other. To me, this was a clear indication that new hybrid identities were being forged. As teachers and chaperones, we answered many intriguing questions which went beyond the learning of English and Canadian culture. In short, these 24 students were engaged in the very complex and enriching process of self-discovery.

While these notions may appear rather

abstract, let me reassure the reader that they were real to the 24 students who went to Brock University this year. I am confident in making this claim because I, too, spent some time in English-speaking Canada when I was about twenty years old. That's where I learned English, my second language. Therefore, not only did I have the privilege of reliving past experiences and old memories during this short-term study abroad program, my belief in the intensity and significance of such cross-cultural experiences was confirmed.

Having painted a broad picture of the HGU-Brock University Program, let me include a few details of interest. The HGU-Brock University short term study program started 12 years ago, and since then, the program has been a resounding success. For approximately three weeks, our 24 HGU students were integrated in the larger Intensive English Language program (IELP) at Brock University. This program currently welcomes students from many different countries to study English. Some of these students stay in the program for a few months and others stay for up to a year. This year, the IELP has served over 400 international students, and currently employs about 60 teachers, student service officers and cultural assistants.

These three weeks of intensive studies at Brock were a great opportunity for HGU students to have a different kind of classroom language learning experience. The ESL program at Brock emphasizes students' individuality by allowing every student to express their views in the classroom. As such, our HGU students actively shared their views on various topics with students from other countries.

There were so many things to do during these three weeks. During weekdays, our HGU students were placed in various ESL classes. They studied the four main skills through challenging classroom activities and direct exchange with people of different cultural backgrounds. Every class was conducted so as to make sure that students understood clearly what to do and what their responsibilities were. Students were strongly encouraged to use English at all times and to mix with everyone in class. After class and during weekends, many special activities were organized to encourage further exchanges between students. These included wine tours, historical excursions, various sporting activities, arts & crafts fairs, picnics, and beach activities. Of course, students had many chances to enjoy shopping and appreciate the life in downtown St. Catharines — which is, let's not forget, a beautiful town at the heart of Canadian history. There were also valuable opportunities for everyone to discover the unique natural features of St. Catharines and the Niagara Region. Our students really enjoyed the world famous Niagara Falls, the lovely little town of Niagara-on-the-Lake, and the dynamic and cosmopolitan city of Toronto.

Let's not overlook perhaps the most important aspect of this program: the homestays. Being placed in different host families and adopting a Canadian lifestyle, HGU students were able to explore an important side of life in Canada. In short, staying in a host family offered an ideal chance for students to develop and apply cultural knowledge in real life.

Without a doubt, these three weeks at Brock University were, for our HGU students, filled with extraordinary and unforgettable experiences. If some students are unsure about whether they should join in next year's three week program at Brock University, I encourage them to ask any of the 24 HGU students who went this year. They are sure to provide them with very convincing reasons why this is a once in a lifetime opportunity.

英語の力

1 部　英米文化学科 4 年　**近藤　迪子**

今回の国際文化演習で現地で感じたことは、カナダでなら周囲の人を気にすることなく自分の意見を言いやすいということと、英語の力は素晴らしいということです。

例えば教室では先生の発言に対して他の国の留学生は手も上げずに自分が思ったことを率直に発言します。自分の発言に自信があるとかではなく、時には冗談であったり、独創的なことを言うので、授業はとても賑やかに進み、また間違った事も多く発言するので、その都度問題解決にもつながりとても良い雰囲気でした。

バスの中では混雑している時に、運転手ではなく乗客が大きな声で「Go back please!」と他の人に促したりするなど、今すべきと思ったことを堂々と大きな声で言っている姿に感動しました。

家で食事中の時は、会話の中で必ずと言ってよいほど「How about you?」を聞きます。会話に参加して、自分の意見をどんどんいうことが大切だと感じました。

そして私はこのような環境にいるのがとても心地よかったです。自己中心的だとも思われるかもしれませんが、良い意味で自分をありのまま出せました。日本でも自分からこのような雰囲気を作り出していけたら良いなと思いました。

私は今後英語を使って仕事をする予定はないのですが、今回ブロック大学で中国人、韓国人、サウジアラビア人、ベネズエラ人、イタリア人と様々な国の留学生と過ごして、英語の力は本当にすごいと心から思いました。完璧な英語が話せなくても、片言の英語とジェスチャーで世界中の大陸の人と意思疎通が可能です。自分の思いが相手に伝わるということはこんなに嬉しいことなんだなぁと、カナダに来て思うことが出来ました。これからの将来、いつ外国人の方と出会うかわからないので、その時に少しでも打ち解けることが出来るように英語だけは忘れずに使っていきたいと思います。

国際文化演習に興味のある方は、是非先延ばしにせずカナダに行ってほしいです。3 週間はあっという間です。ブロック大学では 1 年間 4 年間と留学している人が沢山います。早いうちに一度海外へ行ってみて、その経験を通して大学生活を有意義に送ってもらいたいと思います。

異文化との遭遇

1 部　英米文化学科 3 年　**濱　良平**

僕は 3 年生になってこの研修に参加しました。初めての海外渡航ということで、初めの数日くらいは自分でも驚くほどガチガチに緊張していたのですが、現地の人々の温かい歓迎や思わぬ優しさに触れて、緊張が次第に薄れリラックスして過ごせるようになりました。

カナダでの 3 週間は、楽しかったのと同時にとても忙しく、日々があっという間に過ぎていきました。北海学園の学生も他の留学生と同じように平日は毎日大学に通って留学生用の英語学習プログラムを受けました。そこで一番苦労したのは、他の留学生とのコミュニケーションでした。自分がいかに英語でのコミュニケーションに慣れていないのかを改めて知る契機となり、これを今後の課題として、日々の英語学習にもっと真剣に取り組もうと思うようになりました。

授業以外にも、カナダの歴史や文化を学ぶための様々なアクティビティーがびっしりと用意されており、毎日みんなで色々な場所へ出かけました。その中でも特に印象に残っているのがナイアガラの滝を見たことです。滞在したセントキャサリンズという街はナイアガラの滝の近くに立地しているということもあり、3 週間のスケジュールの中にもナイアガラのツアーがしっかりと組み込まれていたので、ナイアガラの滝の驚異や壮大さを、自分の目や耳や肌で思う存分堪能することができました。

カナダでの生活を通して一番強く感じたことは、自分が「日本人である」ということでした。実際に日本を飛び出して、カナダの中でマイノリティーな存在となってみることで初めて、日本の文化の特殊性やカナダから学ぶべき点、また逆に、カナダにはない日本の良さというものを感じとることができました。この夏休みの 3 週間で、カナダを存分に満喫し、かつ文化の違いについても考えさせられ、とても有意義な時間を過ごすことができました。いつかまた個人的に海外旅行をするときや、これから始まる就活にもこの経験を有効に生かして行こうと思います。

とても気さくなセントキャサリンズ市長（左）

I Love Canada!

２部　英米文化学科３年　**長野　勇**

カナダは移民が多いため、現地の人の移民に対する受け入れの姿勢が素晴らしかった。店員やタクシードライバーはもちろん、一般の人も我々が現地の人ではないとわかったら、優しく丁寧に話しかけてくれたしサポートもしてくれた。とても親切だなという印象をもった。カナダの人は他人を馬鹿にしたりすることはないように感じた。また、他人の目を気にすることなく、自由に生活していたように思えた。一人ひとりが自分自身に誇りを持って堂々と振舞っているように感じた。これは日本にはないものだし、素敵な文化だなと感じた。

この３週間はとても有意義な時間を過ごせたがこれで終わってしまってはもったいない。この３週間で知り合えたホストファミリーやクラスメイトと、Skyp などを通して連絡を取り合っていきたい。そして、英語学習に役立てていきたい。普段、英語を学習していても実際に会話をすることは少ない。この３週間で「思っていたより聞きとれるし、言葉も伝わる！」と思った。ただ使わないだけで使えばどんどんうまくなると思った。

このようにカナダへの演習を通して英語への意欲がすごく高まっている。たくさん勉強してまたカナダへ行きたい、たくさんの人と接したいという気持ちに満ち溢れている。僕は高校の教員になって英語を教えたいという目標があるので、そうなった時には英語だけでなく英語を通して異文化に触れることの楽しさ、素晴らしさなども伝えていけたらなと考えている。

来年以降もまたこのプログラムを続けていってほしいと思うし、将来的には半年から１年くらいの長期のプログラムがあれば学生にとってより充実したプログラムになるのではないかと感じた。今後このプログラムに参加する学生には「とにかくたくさん英語を使うこと、たくさんの人と関わること」を心掛けてほしい。下手くそでも意外と英語は伝わるし、相手はそんなことはあまり気にしていない。大切なのは伝えたい、仲良くなりたいという気持ち。それが一番大事。

最後に演習を企画し、金銭的な援助をしてくださった北海学園大学、ブロック大学引率の岩崎まさみ先生、ジェレミー・ブシャー先生はじめこの演習に関わってくれた方々に感謝申し上げます。

多文化を学ぶ

2 部　英米文化学科 2 年　**藤井麻里絵**

1．現地で感じたこと・学んだこと

カナダは自然に満ち溢れていて、現地の人たちもとても親切で、英語を学ぶ環境としても最適な場所であると感じました。

私はこの文化演習で、様々な国から来ている留学生と触れ合うことで英語の大切さというものを学びました。中国人や韓国人、ロシア人など、たとえ自分がその言語を知らなくても、英語というひとつの言語でコミュニケーションをとることができる、ということです。

また、カナダ以外の文化もそのコミュニケーションによって知ることができました。日本に居るだけでは知ることができない、外国人と直接触れ合うことで初めて知ることのできる、その国の人たちの考え方、常識、礼儀などを学ぶことができました。

2．この経験を今後どのように生かしていきたいか

英語ひとつの言語で様々な国の人たちと会話ができるということは、グローバル化していくこれからの日本にとってより重要なものになっていくと思われます。将来英語教員志望の私はその大切さを、今回の文化演習で学んだ経験とともに、将来の生徒たちに教えていきたいと思っています。

また、自分から言葉を発するという力は、行く前と比べて大きく成長できたと思います。この感覚を忘れてしまわないよう、自分で英語を使ってコミュニケーションできる場を探して、より英語力を高めていきたいです。

3．これから国際文化演習に参加する方へのアドバイス

私は、難しい語や文法を完璧に覚えていく必要はないと思いました。もちろん、知っていれば安心です。しかし、難しいものを覚えたところで様々な国から来ている留学生の人たち全員とスラスラ会話できるわけではありません。いかに簡単な語や文で、いかに自分の意志を伝えることができるか、が重要です。

なので、自分は英語力が足りないからなどという理由で迷ったりしないでください。行けるのは学生である、今しかありません。この企画は英語や多文化を学ぶ上で本当に素晴らしいものだと思います。私は参加して、全てにおいてものの見方が変わりました。ぜひ、積極的に参加することをお勧めします。

2012年度韓国大田大学校夏期研修

チャレンジ

1部　英米文化学科　2年　**本間美沙都**

私は昨年の1月頃から韓国に興味を持ち始め、自分で参考書を買ったり学校で韓国語の授業をとったりして少しずつ勉強を始めました。私にとって韓国語の勉強は楽しく、やるほどにもっと勉強したいという気持ちが膨らんでいきました。そんなとき、私は韓国の夏季研修のプログラムがあるのを知り、ぜひ参加したいと思いました。しかし、挨拶や簡単な文法など基本しか身についてない韓国語初心者の私が、この研修に参加して大丈夫なのか、さらに韓国は私にとって初の海外になるので、異文化に慣れることができるか不安な部分があり悩んでいました。しかし、それ以上に今しかできないことをやりたい、もっと韓国語を勉強したいという気持ちのほうが大きく、思い切って参加することを決意しました。

期待に胸を膨らませ韓国に降り立った私はとても感動しました。当たり前なのですが、周りの人は皆韓国人で、向こうから見たら私たちが外国人。そして、見るものすべてが韓国語なのです。仁川空港から大田に行くバスの中では友達と目にはいった韓国語をひたすら読んだりして韓国に来られた喜びを隠しきれませんでした。現地の生活は、平日の午前中は学校へ行き留学生の人たちと韓国語の授業を受けました。先生は韓国人なのですが、授業はとても優しくわかりやすく教えてくれるのでとても楽しかったです。午後からは自由時間となるので、大田大学のボランティアの学生と一緒に街へ行ってショッピングを楽しんだり、韓国料理を食べたり、韓国語を教えてもらったり、異文化に触れ楽しく充実した時間を過ごしました。週末には釜山やソウルに行きました。なかでも私が一番印象に残ったところは全州というところです。そこではビビンバを自分たちで作ったり、韓服を着る体験をしました。これまでの旅行では想像できないような貴重な経験ができました。

こうして、3週間という短い間ですが韓国で生活することによって、語学力も少し向上しました。韓国語に触れる時間が日本で暮しているときよりはるかに長いこと、そしてなにより大田大学の学生と話したり、買い物するなど韓国語を使う場面がたくさんあるからだと思います。韓国で暮すことで、一つ一つの行動が勉強につながっていきます。韓国を訪れた当初は、通じるのかという不安や恥ずかしさから、韓国語で話すことを躊躇してしまうこともありました。しかし、その壁を乗り越えた瞬間から語学力は伸びるのだと思います。自分のおぼつかない韓国語でも、理解してもらい会話ができたときの喜びを私は忘れることができません。もっといろいろな単語や文法を覚え、たくさん話をしたいなと思うようになりました。

楽しかった全州旅行

一日がとても早く過ぎ、あっという間に3週間が過ぎていきました。日本と韓国の文化の違いを身を以て実感できたり、韓国で友達ができたり、新しい考えが生まれたり、日本にいるだけではできないことがたくさんあります。自分がやりたいと思ったこと、今しかできないことはチャレンジしてみるべきだと思いました。今までにない充実した夏休みを送ることができ、参加できて本当に良かったと心の底から思います。

岩崎ゼミ・米坂ゼミ

震災ボランティア報告

―その２―

学生たちによる宮城県石巻市におけるボランティア活動は、昨年に引き続き行われ、タイトルにもあるように、岩崎ゼミに加えて、米坂ゼミの学生たちも参加した。2012 年には２月から 10 月までの期間に、６回の活動が行われ、被災地に根を張った活動として定着しつつある。本稿では活動に参加した学生たちの手記を中心に、学生のボランティア活動の記録と、大震災から２年目を迎えようとしている被災地石巻市の様子を伝える。

被災地ではまだ余震か続いており、そのために第７回目のボランティア活動は残念ながら中止となった。2012 年 12 月７日、米坂ゼミの学生を中心としたグループが、苫小牧からフェリーに乗った直後に東北地方に大きな地震が起き、さらに石巻市を含む東北一帯に津波警報と避難命令が出された。米坂先生が現地の受け入れスタッフと相談した上で、急遽、石巻行きを中止し、すでにフェリーに乗り込んでいた学生たちは、先生の指示に冷静に従い、札幌へ帰ってきた。この一件が物語っているように、被災地はまだ大震災の余震による緊張が続いているのが現状であり、そこへボランティアへ行く学生たちの思いは熱い。

2013 年１月 25 日（金）には、学生たちの企画・運営により、第２回報告会「震災ボランティアを考える～学生にできること～」を開催した。今年は、報告会に先駆け、石巻市で学生の受け入れをして下さっている中山奈保子さん（三陸こざかなネット代表）が、自身の震災体験を漫画冊子として出版されたことを記念して、原画展を開催した。加えて、報告会では中山さんご本人から、石巻の様子を報告して頂いた。

「被災地と繋がりたい」という学生たちの思いから始まったボランティア活動が、同じ思いを持つ後輩たちに次々に受け継がれ、被災地の復興の力となる事を願って止まない。

（岩崎まさみ）

ボランティア２月便

田中佑基、近藤美香（法学部）、藤田　茜

仮設住宅で子供たちと遊ぶボランティアの受け入れをしてくれていた中山さん一家が、被災した実家に戻ろうと決意をされ、２月便から活動の拠点は石巻の工業港の近くの築山地区に移りました。振興住宅街を襲った津波は、ほとんどの家を崩壊し、残された家は数えるばかりでした。津波が２階の床ぎりぎりまで到達した中山さんのご自宅には、まだ電気は通っていなく、もちろん水道もトイレも使えない。タンクに水を入れて運び、雑巾で壁や床の泥を拭う作業をしましたが、あらゆる所に泥と砂が詰まっており、改めて津波の威力を知る思いでした。しかし家の再建を目指す掃除は楽しく、中山さんのお母さんの後ろ姿には力がみなぎり、泥まみれの顔は輝いていました。最後日には２階の子供部屋で、カセットコンロを使って、皆で豚汁を作りました。暖かい豚汁は皆のおなかと心を十分に温めてくれました。

ボランティアに参加した近藤美香さんは、鋭い感性で、その時の体験を以下のようにまとめています：

津波の跡を拭きとる作業は大変ですが、嬉しい作業でした

中山さんの前向きな姿にはとてつもない覚悟と強さを感じました。しかし窓の外を見て「また家が減ってる。」とつぶやいていたのを聞いて明るくしていても複雑な気持ちが今もあるのだと感じました。私達には、その複雑な思いを何とかしてあげられるような力は無くても、幼いながらにしっかりお母さんを支えているよっちゃんとこっちゃんとたくさん遊んで、たくさん笑わせてあげようと思いました。

天井の泥を丁寧に拭きとりました

ボランティア５月便

野村佳奈、山崎夏海、中村南美（佐藤ゼミ）

ボランティア５月便は５月 11 日から 18 日までの１週間の期間、津波で泥を被った家の掃除を中心に活動しました。そのお宅は津波によって１階は全て流され、２階もひざ下くらいまで水に浸かりました。床や壁、天井に砂と泥がこびりつき、何度拭いても雑巾はすぐに真黒になり、気付くと私たちの靴下も真っ黒でした。１階の台所戸棚は泥が残って固まっており、きれいに取る事はできませんでした。でも「前よりきれいになったね。」と言われたことが嬉しく、それがやりがいでした。

石巻でもっとも印象に残っているのは、活動初日に見た、津波と火災の被害にあった門脇小学校の光景です。小高い丘に広がる住宅地を抜けると、丘の向こうには何もありませんでした。あたりに残っていたのは家の土台や焼け焦げた車、お風呂のタイルなどだけでした。小学校に近づき、その被害の様子に、私たちは言葉を失いました。３階建ての校舎の窓ガラスは全部割れていて、教室の中には机や椅子が倒れ、ランドセルや上靴がそのまま残っている様子に、あらためで津波の恐ろしさを感じました。

ボランティアに参加した私たちは、見た事、聞いた事、感じた事を自分の周りに伝える事で、東日本大震災を忘れないことは大切だと感じました。またこれからも石巻が綺麗になって行く様子を見続けて行きたいと思います。

屋根裏の砂はほうきで掃き出しました

おじいちゃんの遺品を丁寧に掃除

ボランティア６月便

小倉穂乃実、長田大樹、若月瞬

2012 年６月、日本で大地震が発生してから１年と３カ月程経過した頃、私たちは宮城県石巻市で７日間復興ボランティアに参加した。駅前の商店街では営業が再開されている店も多く、穏やかな雰囲気が漂っていたが、復興への思いが書き込まれた白い鯉のぼりや、津波の押し寄せた時の水位が刻まれた柱などが街の至るところに見受けられて、そこには震災を乗り越えてゆく、町の人々の意志がともにあった。

一度駅前を離れると、町はまだまだダメージを残した状態であった。地盤沈下してしまい、水面がギリギリまで迫った船着場や、津波の高さを知らしめるような、一階部分に大きな損害が見られる民家、地震による火災で、全焼してしまった学校や車も残っていた。いかに規模の大きな震災であったかを、淡々と物語っているようであった。

主な活動内容としては、津波の被害を受けた

民家の修繕と看護師の方々と仮設住宅を訪れ、高齢者向けの健康診断のお手伝いの二つである。活動を通して、様々な人と関わることができたわけであるが、活動中、強く感じたのは、復興への思いだ。辛い経験、恐怖を乗り越えて、現状を変えてゆこうとする思いは、ボランティア団体の看護師さん方や、お手伝いさせてもらった民家の家主の方、健康診断に来てくれた高齢者の方々、どの人からも感じられた。この気持ちこそ、もっと全国に広く、深く伝わるべきだと私は思った。

2011 年、3 月 11 日に多くの命が失われたが、同日、そのような状況下で新たな命が誕生していたのも事実だ。震災がおこった直後から未来を変えてゆこうとする意思がそこにはあった。必要なのは、日本の人々が強く結びついて、宮城県を中心に、日本復興に積極的に取り組む気持ちだと思う。そのために、より多くの人に宮城県に目を向けてもらい、復興を意識してもらえるように努力し、自分たちもできることから取り組んで、被災された方々を応援していこうと思った。

復興の強い意志

ボランティア 8 月便

石川友貴、佐々木亜夢、志賀保奈美（井上ゼミ）

1）8 月便のボランティア活動は 2 種類あり、キャンナスという団体の手伝いと学生ボランティアを始めた当初からお世話になっている個人宅の手伝いだった。団体の手伝いとしては、仮設住宅に行ってスタッフの方々が健康診断をしている傍らで、住民の方の話し相手になり、体操やバルーンアートをした。また、お祭りにも参加した。獅子舞が出てきたりカラオケ大会をやったり、アットホームな雰囲気だった。思っていたよりも笑顔が多く、私たちが元気を与えるはずが、むしろ私たちが元気をもらった。震災によって失ったものを嘆いてばかりはいられない、一日も早く復興しようという強い思いが感じられた。

個人宅での手伝いとしては、草むしりや庭の掃除が中心でしたが、津波被害を受けた土は固く、ガラスの破片がたくさんあった。向かいの家の方は皆亡くなられたそうで、そこに残ったままだったがれき拾いもした。傘やパソコンなどの日用品、草の生えたズボンなど、平和に暮らしていた面影があり、それが突然壊れるという非現実的な光景を見た。ニュースで見てもいまいち現実に起こったことだという実感が沸かなかったが、現地に行ってがれきの山や津波の爪痕を自分の目で見ることにより、はじめて実感がわいた。

2）「百見は一体験にしかず。」これは私が今回のボランティア体験を通して得た言葉です。これはテレビや新聞で見る被災地の様子より、実際に自分の足を踏み入れて感じることが大切であるということから作りました。

まず初めに現地で見たのは、震災から一年以上経っても当時の状況を感じさせられるような光景でした。3 階まで窓ガラスが割れた小学校やそのまま横倒れになった建物を見て言葉が出ませんでした。テレビや新聞よりもずっと重くのし掛かるような光景でした。しかし、ボランティア活動を通してもっと印象に残った光景は、計り知れないほどの被害状況下であっても、前向きに笑顔で暮らしている現地の方々の姿でした。中でも印象に残っているのは、仮設住宅で行われたお祭りに参加した時のことです。仮設住宅の人々が協力し合ってお祭りを作り上げ、伝統芸能の獅子舞を大切に受け継いでいました。獅子舞を楽しむ顔はどの人も最高の笑顔で、私も一緒にお祭りを楽しむことができました。

実際に自分の足を踏み入れなければ感じられなかった事がたくさんありました。私がしたことはささやかな事だったかもしれませんが、これからも岩崎ゼミや北海学園大学を通していろんな人の力が継続的に加わって、大きな支援になってほしいと思います。もっと多くの人が現地に行って感じてきて欲しいと感じました。

瓦礫の中からパソコンや靴が出てきました

ボランティア９月便

高岡木乃実、常富雅人

1）2012 年９月、ゼミの活動でボランティアに参加する機会を得て、東北へ足を運びました。活動に参加する際、北海道の知人たちには「もう復興したんじゃないの？」と尋ねられました。私も復興が進んでいるのを半ば期待していましたが、あの災害から一年半が経った当時も瓦礫は積み重なっており、復興には程遠い状態でした。限られた時間や活動の中で学生の自分に何ができるのかと悩み、考えついたのは、東北の人々や状況、活動を知り、他の土地の人たちに伝えるということでした。東北にはまだ多くの力が必要です。多くの人に知ってもらうため、これからも活動を続けていきたいと思います。

2）伝えること。それが一番大切だと今回のボランティアを通じて認識しました。写真や言葉では表現しきれないぐらいの現状がある中でも、被災地の人々は、一人ひとり、思い思いに、一生懸命でした。メディアや写真を通してみる被災地と、実際に足を踏み入れて感じる被災地は、全く異なるものでした。私は、ここ、北海学園から沢山の人に被災地の現状を伝えるため、そして支えるため、何か自分たちが出来ることを精いっぱい頑張る必要があると考えます。形は問いません。無理をせず、自分たちのペースで、この支援活動が今後も続いてほしいです。

花壇作り

土壌改良資材を使って、花壇に花を植えました

ボランティア 10 月便

中村南美、五十嵐梨子（上杉ゼミ）、
真鍋康佑（北星学園大学）

私たちは 10 月 26 日から 11 月３日まで石巻へ行き、主にハロウィーン・パーティーと中山さんのおばあちゃんのお家で庭のヘドロをとる作業をしてきました。ハロウィーン・パーティーでは色々な年齢の子供たちがいましたが、普段は口にすることのない外国のお菓子を食べたり、ジャックオーランタンを作ったりして楽しんでもらうことができました。今は子供たちが遊んでいることは少ないのですが、近い将来築山三丁目でこの日のように子供たちが元気に遊ぶ姿が見られるといいなと思いました。

ハロウィーン・パーティーが終わった後は、中山さんのおばあちゃんの家で掃除とヘドロを取り除く作業をしました。土を掘り起こし、ヘドロを除去するヘドロバスターというものを土の中に混ぜ込みました。ここがお花畑になっているところをまた見に行きたいと思いました。

ボランティア活動の後半は、看護師さんたちのキャンナスでの活動に参加しました。地域の集会所を回ってお話をしたりするお茶っこという活動では、用意していたバルーンアートを使って一緒に作りながら色んなお話を聞かせてもらうことができました。

私は昨年２度石巻へ行きました。１度目より２度目の方が良くなっているなぁと感じることも多かったのですが、１度目に来た時にあった家がなくなっているということもありました。家を修理して住みなおすには半年以上かかりますが、壊すのは数日で終わってしまいます。住みなおすには時間もお金も気力も要りますが、少しでも私たちがお手伝いをし、地域の繋がりを取り戻して欲しいと思いました。

ハロウィーン・パーティーにはたくさんの子供たちとお母さんが来てくれました

卒業生通信

コンビニエンスストアに勤務して

1部　英米文化学科　2011年卒（上野ゼミ）　**吉田　豊美**

今日、街を歩けば至るところでコンビニエンスストアを目にします。昼食のための弁当を買う人や、夕食の材料として野菜を買う人など、コンビニエンスストアは生活の中でさまざまな役割を果たしています。

現在、私は北海道に約1,000店舗あるセイコーマートの本社で、トレーナーとして接客指導の仕事をしています。主にアルバイトやパートの人たち向けに接客に関する研修を行っています。3年間のセイコーマートでのアルバイト経験と、3年半働いた飲食店での接客経験を活かして、接客の重要性について研修を行っています。研修はお茶を飲んだりお菓子を食べたりしながら、クイズをゲーム形式で行うことやグループワークなども取り入れることで、楽しんで学んでもらえるような内容になっています。別の店舗の方と情報交換ができるような内容にもなっています。また、高校生や主婦など、さまざまな年代の人たちと話をすることができ、そこがこの仕事の楽しさだとも感じています。現在は主に函館地区と苫小牧地区を担当しており、函館には毎月5～6日間出張で滞在します。自分の担当地区のほかにも、これまでに帯広・釧路・根室・稚内・旭川・富良野・静内など、さまざまな市や町を訪れました。移動はほとんど車で、出張先では車からさまざまな風景を見ることができます。天気の良い日はとても気持ちが良いです。きれいな風景や、出張先で食べられるおいしい食べ物もこの仕事の魅力だと感じています。

高校生時代にセイコーマートでアルバイトをしていたことと、セイコーマートにはさまざまな部署があり、学んできた英語を活かすことができる部署もあることから入社を決めました。現在の部署は業務の中で英語を使うことはほとんどありませんが、海外から講師を招いてのトレーナー向けの社内研修では、講師の方の話を通訳を通してではなく、直接理解することができました。大学で4年間学んできた英語が自分の力となっていることを、この社内研修のおりにはっきりと感じました。

ブロック大学語学研修の思い出

私の会社では、アメリカ人の先生に来ていただき英語セミナーを開講しています。私も週に1度受講しています。英語セミナーには上級と中級の2コースがあり、ビジネスの場面で活用できる表現や、英語のビジネスメールの書き方などについて指導を受けています。また、TOEICも社内で受検することができます。言語は使っていなければ忘れてしまいます。業務の中で英語を使うことはほとんどありませんが、このような環境の中で現在も英語の勉強を続けることができています。

松前の海

大 学 院 の 窓

大学院に学ぶ

文学研究科　英米文化専攻　修士課程 1 年　**大島　直樹**

私は学部生時代にアメリカ史をテーマとするゼミに参加していました。卒業論文では、冷戦期にアメリカで巻き起こった赤狩りの嵐「マッカーシズム」がアメリカ映画界に及ぼした影響について検討しました。大学院ではその過程で得た知見を生かす形で、同じ冷戦期において高揚を見せた公民権運動に焦点を移し、冷戦下の米ソ対立が運動にどのような国際的影響を与えたかについて研究しています。

私が大学院に進学したのは、将来研究職に携わりたいという思いからというよりも、就職活動や実際に何らかの職業に就いたときのための職業訓練的意味合いから決断したことでした。研究を進めるにあたり公民権運動についての知識が不十分であった私は、初めに大まかな流れを把握するために分厚い英語の文献を 1 冊読み始めました。各章ごとに内容をまとめながら読み進めていくうちに、読解力や文章能力が身についていくように感じ、半年ほど経った頃には、速読力も、わかりやすい文章を書く力も格段に上がっていました。また、より内容の理解を深めるために日本語の文献も参考にするなど、常に効率の良い方法を考えて研究を進めることに徹してきました。

修士論文のテーマとしては、1954 年に公立学校における人種隔離を違憲とし、アメリカ人種関係史における歴史的判決として認識されているブラウン判決を取り上げることにしました。私はまず、判決前後の政治的・社会的背景を明らかにするため、文献の内容を整理することにしました。始めに、ブラウン判決に関わる時代におけるトルーマン、アイゼンハワー両政権による公民権政策が、どのような国際的影響を受けながら展開されたのかついて整理していると、ブラウン判決を形成したアール・ウォーレン主席判事率いる通称「ウォーレン·コート」と呼ばれる判事団についての内容をより詳しく検討する必要性を認識し、論文の構成を成す研究内容が充実してきました。また、テーマについて指導教員と話し合ううちにアール・ウォーレンに関して大変興味深い事実が浮かび上がってきました。これにより論文構成のイメージがしやすくなり大きな一歩を踏み出せたのではないかと考えております。最高裁判所の判決をテーマとして取り扱う以上、判決の形成過程やその解釈についてなどの法学的なアプローチも導入していかなければなりませんが、私は文学研究科に所属しているので、あくまで歴史学的な観点から描き出したいと考えております。

満足のいく完成度の論文に仕上げるには、たくさんの文献を読み内容をうまく整理することが求められますが、2 年という時間は少し短いように感じます。しかし幸いにも、先輩の院生の方々とも交流する機会が多く、研究の面や生活の面でいろいろなアドバイスをいただける環境にあるので、プライベートの時間と両立してそれらを有効活用していきたいと考えております。短い期間を少しでも無駄にしないよう積極的に働きかけ、自分を磨き上げていきたいと思います。

■学会・研究発表

佐藤　貴史

「パネンベルクの学問論――*Theologie und Wissenschaftstheorie* の翻訳に関するノート――」、9月、青山学院大学総合研究所研究プロジェクト「キリスト教大学の学問体系論」研究会、青山学院大学

「レオ・シュトラウスの『哲学と法』」、12月、第21回政治哲学研究会、立命館大学

柴田　崇

「サイボーグの生態学的転回―『拡張』から『延長』へ」、7月、日本生態心理学会第4回大会（公立はこだて未来大学）

「M・マクルーハンの『内部環境』論」9月、日本カナダ学会第37回年次大会（関西大学）

手塚　薫

「千島列島への移住と適応」、10月14日、第27回北方民族文化シンポジウム「環境変化と先住民の生業文化―海洋生態系における適応―」、北海道立北方民族博物館（オホーツク・文化交流センター）

「Archaeological Evaluation of Expansion and Retreat of Prehistoric Cultures」、11月、Comparative Human Ecodynamics on the Northern Ring of Fire: A GHEA Workshop on the Aleutians and Kuril Islands, University of Washington, Seattle, Washington

テレングト・アイトル

「東洋における修辞学の変遷――日中修辞学の比較を兼ねて（修辞学在東方的変遷――兼日中修辞学比較）」（2012年10月27日）2012年世界中国語修辞学会第三届年兼修辞学国際学会（The Third Biennial Conference of the Chinese Rhetoric Society of the World & International Conference on Rhetoric）. 韓国国立仁川大学（発表原稿：同会議資料集385-394頁）

中川　かず子

「大学と地域をつなぐ教員養成」、10月12日、大学教員養成課程研究協議会第42回大会（パネリスト）、北海学園大学

濱(浜)　忠雄

「ハイチ、栄光の奴隷解放・独立史と苦難の現在――植民地主義の『遺産』」、10月6日、「同志社植民地主義研究会」、同志社大学今出川校舎

本城　誠二

「ジャズのスピリチュアリティと60年代」、11月、日本英文学会東北支部第67回大会、シンポジウム（米部門）「60年代合衆国音楽と対抗文化――文脈と微視」、岩手県立大学

「ポストモダン小説を考える――乱反射するテクスト『重力の虹』」、12月、日本アメリカ文学会北海道支部第22回大会、シンポジウム「『アメリカ文学史』を読んで考えたこと」、北海学園大学

■著書

寺田　吉孝

『ドイツ、フランス、中国、ロシア、韓国・朝鮮とその周辺地域の言語と文化』（共著）、4月、試行本

『ロシア語文法ハンドブック3訂版』、10月、アーバンプロ出版センター

安酸　敏眞

『歴史と解釈学―《ベルリン精神》の系譜学―』（単著）知泉書館、7月、600頁、知泉書館事典項目

「プロテスタント概論」、12月、『世界宗教百科事典』、丸善出版株式会社、132-135頁

■論文

井上　真蔵

「異文化接触としての姉妹都市交流―守口市とニューウエストミンスター市のケース―」、11月、『人文論集』第53号、北海学園大学人文学部

岩崎　まさみ

「無形文化遺産保護条約の概要とその意義」、12月、『年報　新人文学』第9号、北海学園大学大学院文学研究科

上野　誠治

「翻訳と解説　形態論：語構造の分析（1）」、11月、『人文論集』第53号、北海学園大学

人文学部、北海学園大学人文学部、137-161頁

追塩　千尋
「片岡山飢人説話と大和達磨寺―古代・中世達磨崇拝の一面―」、12月、『年報　新人文学』第9号、北海学園大学大学院文学研究科、8-45頁
「『古今著聞集』が描く日本仏教史―巻二「釈教」編の構想―」、12月、『年報　新人文学』第9号、北海学園大学大学院文学研究科、46-68頁

小野寺　靜子
「万葉集巻八・一五六二～一五六三歌をめぐる問題」、7月、『人文論集』第52号、北海学園大学人文学部、（一）-（一二）頁

柴田　崇
「北海学園大学人文学会　記録　第6回例会　マクルーハンのメディア論：サイボーグのプレテクスト」、7月、『人文論集』第52号、北海学園大学人文学部、39-74頁

中川　かず子
「日本語教員養成の現在と今後の可能性―本学課程との関連において―」、11月、『人文論集』第53号、北海学園大学人文学部、189-216頁

濱(浜)　忠雄
「リンカーンの黒人植民構想とハイチ承認」、11月、『人文論集』第53号、北海学園大学人文学部、217-248頁

■講演など

追塩　千尋
「凝然の宗教活動と伊予」（シンポジウム「凝然と今治の中世石造物」講演、今治市　イマバリストーンルネサンス）、10月13日

大谷　通順
「中国の父親像」、10月20日、北海学園大学・市民公開講座『世界の言語と文化のモザイクを眺める』、北海学園大学C30教室
「中国を知り、知らせること―『支那通』井上紅梅の軌跡―」、10月21日、第20回札幌大学孔子学院講演会、札幌大学サテライトキャンパス

田中　綾
「没後百年石川啄木と現在」、11月11日、札幌市清田図書館

寺田　吉孝
「キリル文字を知る」、10月27日、北海学園大学・市民公開講座『世界の言語と文化のモザイクを眺める』、北海学園大学C30教室

中川　かず子
「自然主義教授法と直接法―日本における英語・日本語教育への影響」、1月21日、北海道日本語教育ネットワーク研究集会、札幌エルプラザ

本城　誠二
講演：「アメリカ映画について」、7月、創造学園豊平塾、札幌市月寒公民会館

■評論・エッセイなど

岩崎　まさみ
（書評）Heritage Regimes and the States, Gottingen Studies in Cultural Property, Vol.7, 2012, Ed.. By R. F. Bendix, A. Eggert, and A. Peselmann, University of Gottingen

佐藤　貴史
（書評）「近代世界における課題としての解釈学――書評：安酸敏眞『歴史と解釈学――《ベルリン精神》の系譜学――』」、11月、『人文論集』第53号、北海学園大学人文学部、163-188頁

田中　綾
（書評）時田則雄歌集『ポロシリ』（角川書店）、『短歌往来』8月号、ながらみ書房
（書評）辺見じゅん著『桔梗の風』（幻戯書房）、『東京新聞』『中日新聞』10月21日
（評論）「今、『散文精神』を思う」10月、『詩の練習』第4号、同発行所
（評論）「批評の自立性」、『うた新聞』10月号、いりの舎
（評論）「『菱川善夫著作集』概観」、『短歌往来』11月号、ながらみ書房

（解説）「解説」北見鳩彦著『遼海』11月、喜怒哀楽書房
（選評）「評論」10月、『さっぽろ市民文芸』29号、札幌市民芸術祭実行委員会
（選評）「第27回北海道新聞短歌賞」、『北海道新聞』11月11日
（作品）短歌10首「見たかい、雨は」、『短歌研究』11月号、短歌研究社
（対談）「啄木短歌を見つめ直して」（新井満氏と）『北海道新聞』9月24日、10月1日
（コラム）「書棚から歌を」『北海道新聞』7月1日◇7月8日◇7月15日◇7月22日◇7月29日◇8月5日◇8月12日◇8月19日◇8月26日◇9月2日◇9月9日◇9月16日◇9月23日◇9月30日◇10月7日◇10月14日◇10月21日◇10月28日◇11月4日◇11月11日◇11月18日◇11月25日◇12月2日◇12月9日◇12月16日

■翻訳

安酸　敏眞
ジョン·パスモア『人間の完成する可能性』（抄訳）、7月、『人文論集』第52号、北海学園大学人文学部、1-37頁

■研究費

大谷　通順
平成23・24年度北海学園学術研究助成・総合研究（代表：中村寿司）「多文化理解を促進するための教育方法と教材に関する総合研究」（研究分担者）
平成24年度北海学園学術研究助成金（一般研究）「北京故宮博物館所蔵博具の民俗資料としての位置づけ――宮廷内収蔵品から読みとる清代博戯の諸相」

佐藤　貴史
青山学院大学総合研究所2012年度研究プロジェクト（代表：西谷幸介）「キリスト教大学の学問体系論の研究」（研究分担者・青山学院大学総合研究所客員研究員）

寺田　吉孝
平成23・24年度北海学園学術研究助成・総合研究（代表：中村寿司）「多文化理解を促進するための教育方法と教材に関する総合研究」（研究分担者）

安酸　敏眞
科学研究費補助金（研究成果公開促進費〈学術図書〉）（研究代表者安酸敏眞）「歴史と解釈学―《ベルリン精神》の系譜学―」
科学研究費補助金基盤研究（B）（研究代表者高橋義文）「ラインホールド・ニーバーとその現代的意義に関する包括的研究」（研究分担者）

■その他

井上　真蔵
司会：第21回北海道カナダ姉妹都市会議、北海道銀行本店ビル会議室、11月16日

岩崎　まさみ
「捕鯨者たちの大宴会」『食べられる生きものたち』『月刊みんぱく』編集部　編

大谷　通順
第9回北海道地区高校生中国語発表会審査員、12月9日、高等学校中国語教育研究会北海道支部・北海道高等学校中国語教育研究会主催、北海商科大学

小野寺　靜子
巻頭言「真淵と宣長」、12月、『新人文学』9号、北海学園大学大学院文学研究科、2-5ページ

田中　綾
第14回三浦綾子作文賞選考会、12月16日、三浦綾子記念文学館

中川　かず子
（社）日本語教育学会2012年度秋季大会開催（10月13、14日）大会実行委員長
第8回人文学会例会（指定討論者）、12月15日、北海学園大学
第30回全北海道学生競技ダンス大会8種目戦（大会会長）、6月17日、北大第二体育館
第41回全北海道学生競技ダンス大会新人戦（大会会長）、8月25日、北大第一体育館
第45回全北海道学生競技ダンス大会（全道戦）大会会長、11月11日、北大第一体育館

表紙「容貌類異俗」図
彩色、26.7×38cm（間宮林蔵口述・村上貞助編輯筆録『東韃圖記』乾所収　北駕文庫所蔵）

間宮林蔵（安永9［1790］－天保15［1844］）は江戸後期の蝦夷地探検家、測量家として名高い。北蝦夷地（樺太）探索の幕命を受け、文化5（1808）年から翌年にかけて、東海岸は北知床岬まで、また西海岸は北上して間宮海峡を確認、更に北端近くまで踏査した。『東韃圖記』は、林蔵がこの探査に基づき、地名、地勢、産物、樺太アイヌやオロッコ、スメレンクルの風俗・習慣等について詳述したものに、林蔵の師村上島之丞の養子・松前奉行配下村上貞助（秦貞廉）が挿画を加え編輯したものである。

北駕文庫所蔵の乾坤二巻は貞助自筆本との推定もあり、『北夷分界餘話』と題して、文化8（1811）年に幕府へ献上された貞助自筆本（国立公文書館内閣文庫所蔵）に、文章・挿画共極めて近い貴重書である。本書と同名の写本の存在は知られていないが、安政2（1855）年刊の流布本『北蝦夷圖説』を始めとして多くの伝写本がある。

この図は『東韃圖記』乾巻の「南方初島人物」に収められている。当時、樺太（サハリン）の南部に居住していた先住民族の人々について、その容貌や風俗などに多少の違いはあれ「大抵蝦夷島（北海道）に異なる事なし」としている。ただし、「奥地に至るに随て人物何となく南方初島の夷と小異にして其顔色容貌自然に殊俗の夷風を移せり。故に冬月の頃犬皮の衣を服し水豹のケリ（履物）をつけ熊皮の巾を蒙りたる様は異俗の者とあやしむ事多しと云」とあるのがこの画である。また「極寒の地なるが故に島夷長少となく總て魚獣皮を以て襠子脚袢皮履の類を製着す。蝦夷島徒跣夷のごときにあらず。故に其俗一般の異状ありと云」ともある。男夷は漁の帰りであろう。魚を突き刺す槍を持ち、背には巻莫薩と冬期間の貴重な食料とも衣服ともなる獲物の魚を背負っている。
（注：徒跣［はだしで歩くこと］）

（北駕文庫　佐々木光子記）

編集後記

別れの季節がまためぐってきました。人文学部では３月末日をもちまして小野寺先生と寺田稔先生が退職されます。この 38 号には「別れのあいさつ」を投稿していただきました。ご協力に感謝申し上げますとともに、お二人のご健勝を心より祈念いたします。　（池内　静司）

『人文フォーラム』は来年度から少し趣向を変えて再出発する予定です。新しい先生方のお力を得た『新人文フォーラム』の誕生を心待ちにしています。私は降板しますが、池内先生は引き続きご担当です。今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。　（中川かず子）

人文フォーラム 38：2013 年 3 月 4 日発行　編集人：池内　静司、中川かず子　発行人：安酸　敏眞
発行：北海学園大学人文学部（札幌市豊平区旭町4丁目1-40　TEL　011-841-1161）　印刷：㈱アイワード